
七日間の永遠を君と

蝶々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七日間の永遠を君と

【Nコード】

N6188M

【作者名】

蝶々

【あらすじ】

伊織君、大好き。――七日間の楽園
美穂、愛してる。――七日間の花園
まだ、好きなの？――七日間の公園
巡る恋、巡る運命。すべての始まりは沖縄でした。

永遠の七日間 第一章 七日間の楽園（前書き）

これは、連作三部作「永遠の七日間」シリーズの完全版みたいなものです。プロローグみたいな以外はほとんど変わっていません。

永遠の七日間 第一章 七日間の楽園

蒸し暑い空気。

一緒に歩いたアスファルト。

溶けそうなアイスクリーム。

さんさんと降り注いだキャラメル色の陽。

茶色いガラス玉。

チェックの視界。

思い出しても、胸が震える。

優しい言葉。

突き放す言葉。

嘘でかためた言葉。

意地悪な言葉。

すべてが大切で。

すべてがいとおしくて。

胸が躍ったのは、あなたが初めてでした。

あなただけが。

あなただけが、欲しかった。

求めたのはあなた。

求められたのはあなた。

欲したのはあなた。

欲せられたのはあなた。

いつだって、いつだって。

あなたがいれば、それでいいの。

——七日間の樂園

プロローグ お父さんは飛ばされた

それは、去年の夏だった。

七月、大阪は、とある住宅地。

もうクマゼミがじゃーじゃーやかましくなった日差しに背を向けながら、お父さんは座っていた。

『昨日、もうお父さんはお母さんに言ったんだが・・・』

うん、だろうね。

私は思った。

今朝から、お母さんがおかしかったし。

『で？ なんなん？』

関西弁がすらりと私の口からでた。

『あー、じつはだな・・・』

『あ、その前にやっぱ私の推理聞いてや』

言いにくそうなお父さんにぱっぱと言わせようと、あたしはきらりと輝いた。

『あ、ああ・・・いいが』

『ほなまず、時期や。お父さん、税関だから転勤の決定七月やんな？』

『ああ』

気まずそうにうなづくお父さん。

気まずそう、これ決定打。

『ほな、ほぼ百パーセントそれやな。ちゅうことは、お父さんは異動や』

うんうんとうなずくお父さん。

うなずくことしか出来ないぐらいひどいんだな。

『次に、お母さんの反応や』

かちゃんっ！

奥で食器の当たる音がした。

『美和子？^{みわこ} 大丈夫か？』

『・・・ええ、当たっただけよ。割ってないわ』

おっとりしたお母さん異常なまでの動揺、これ決定打その二。

『推理続行するで？ あんな動揺するっちゅうことは、お父さん結構遠いところ行くんじゃない？』

がしゅん！！！！！！！

ぱりん！

ごん。

お母さんがついに割った。

お父さんが飲んてたお茶が入ったコップ落とした。

で、机に頭突っ込んだ。

『・・・なに？ クリーンヒット？』

あれれ、と思った。

『ほな、どこ行くん？』

私は訊いた。

『・・・沖縄だよ。お父さんは、大阪税関から沖縄税関に、二年間

行くことになったんだ。美穂みほはもうすぐ受験だから、お父さんが単身赴任するよ』

悩ましい顔で言った。

正直、沖縄かあ、いいなあ・・・って思った。

それから一年。

私が沖縄の地へ飛んだところから始まる。

七月二十六日（日）少年と国際通りで

「美穂」

お父さんが呼んだ。

那覇の空港からバスで約二十分、官舎に住むお父さんが、舎のそばのコンビニまで迎えに出てくれていた。

「久しぶり」

バス停のすぐそばにあるそのコンビニの前で、お父さんは小さく手を振っていた。

「わ、お父さん、なんか太ったなあ」

けらけらと笑いながら私はお父さんに言った。

若干お腹が出てる気がする。

「なんだって？」

「お腹、出てるやん」

「こっちの食堂の料理は量が多いんだぞ」

「そういう問題やないと思うで、お父さん・・・」

話しながら、私たちは官舎へ向かった。

私は一人、関空から飛行機に二時間揺られてやって来た。

アテンダントには、中三の私を見て、

『あなた、一人で？ えらいわね』

と褒められてしまった。

お母さんは急に出張が入って、来られなくなった。

『美穂？ どうする？ 家に残っててもいいんよ？』

お母さんは言ったけど、

『でも、結果的にはこの家誰もいてへんなるやろ？ ほな、お父さんどこ行った方がええし。キャンセル高いし』

その一言で、沖縄一人旅が決まった。

『それやったら・・・お父さんにどうするか相談しい？ 行き方とか』

そこで聞いたのは、意味不明な土地名だった。

“ ウェバル行きのバスに乗って・・・トミグスクで降りなさい。バス停のそばに、コンビニがあるから ”

『お父さん、もう一回』

“・・・紙、出しなさい”

言われたとおりに漢字を書いた。

『宇栄原って書いて、ウエバル?』

“そう。で、豊見城って書いてトミグスク。トミシロって言われるかもしれないが”

『わかった』

それを頼りにたどり着いたのが、ここ、官舎だった。

「・・・一人で住むには広すぎへん?」

家に入って、私は言った。

「かなり広いよ。なにせ4LDKだからな」

「どっちかって言うと、4DKやない?」

お父さんは軽くスルーして、

「・・・広いんだ、ここは。お隣は親子五人で暮らしてる」

「お隣さん？」

「ああ、お前と同じくらいの子もいる」

気になる。

「すごい可愛い子だったぞ」

可愛い子？

「・・・挨拶行ってこよ」

気温は三十二度。

午後二時の一番暑い時間帯に、私は蒸されながらお隣へ向かった。

友達になれるといいな。

ぴんぽん。

お隣さんは、大城、おおしろという表札が出ていた。

少しして、女の人がちやりと出てきた。

インターホンに出たらいいのに・・・。

「あら、可愛い子じゃない。もしかして、伊織いおりの彼女？」

「あ、いえ・・・。私、お隣の神山かみやまの娘です。大阪から来たんです。いつも父がお世話になってます」

あたふたと説明する。

それを聞いた女の方は、まあ、と感心して、

「なんてえらい子なの！？　うちの伊織にも見習ってもらいたいわ
！！！！！」

「い、伊織・・・？」

って、誰？

「あ、私の息子よ。ほら、伊織——！！！」

奥から、なんだよ母さん、といかにもうっとおしそくに男の子が出てきた。

「息子の伊織よ。ほら、神山さんちの娘さん」

「あ、ども・・・お世話になってます」

伊織君はぺこ、とお辞儀する。

か、可愛いけど・・・。

「こちらこそ」

女の子じゃないじゃん！？

お父さんの嘘つき————っ!!!!

「お父さん」

リビングでチャンプルーをつつきながら、私は言った。

「なんだ、美穂」

「お父さんさ、可愛い子がいてるって言ったやんなあ?」

「ああ、可愛かっただろう?」

「男の子やったやんか!!???」

するとお父さんは開き直ったかのように、

「女の子とは言っていない」

「可愛いとか普通男の子に使わんやろ!?!」

「そんな法律はなかったぞ、美穂」

バカみたいな言葉なのに、墓穴を掘り進めてしまった私はなににも言い返せず結局KO負け。

「・・・あ、私、その伊織君と国際通りに行って来る」

「そうか・・・お父さんも一緒に」

「行かへんから」

むすっとして言い返した。

「なんで？ いいじゃないか。男の子と二人っきりはお父さん不安だなあ・・・」

「お父さんと三人になんのは困るわ。お父さんの財布から三万円ぐらい消えとったら、私ご飯作られへんし」

そこではたと娘の浪費癖を思い出したのか、

「・・・仕方ない。気をつけてな」

すねて半泣きになりながら、お父さんはチャンプルをつまんだ。

待ち合わせなんていないから、私は家の中で涼んでいた。

「美穂ちゃん？ 行くよ」

「あ、はい。ちょお待ってな」

がしつと鞆をつかんで、旅行のために買ったミュールに履き替えた。

中坊がミュールなんて背伸びしすぎか思ったけど、やっぱり新しい靴ってテンションが上がる。

がちよ、と開けた先には伊織君がいた。

「ごめんな、待たせました」

関西弁のイントネーションが直らないまま言った。

「いいよ。行こうか」

ホイップクリームの笑顔はふんわりと笑った。

国際通り。

本当にたくさんさんの土産物屋さんや沖縄料理屋などのたくさんさんの店の周りに、ひしめき合うようにして人が歩いていた。

「あれめっちゃ可愛い」

私が指さしたのは、キューピー人形。

「あれ？　どの柄？　ゴーヤ？　シーサー？」

伊織君がひょいっと覗いてきた。

「あれ。ピンク色のシーサー」

ほらあそこ、といかにも観光客な反応をする。

「欲しかったら買ってあげるけど」

伊織君は飄々と言った。

「ふええ！？ ええよええよ、まだ回りたいし」

「じゃあ、この先のちゅら玉のお店で買ったげる。なんかの記念に」

ホイップクリームは柔らかかった。

少し歩いた先に、そのちゅら玉のお店はあった。

「あ、ここ？」

「そう。なかなかいいだろ？ 俺もめったに国際通りなんか来ないけど、ここは来るたびに通ってるな」

「へえ、そんなええん？」

「入ったらわかる」

意味ありげな顔で、伊織君は微笑んだ。

少年マリアのような微笑だった。

中は白と青を基調とした沖縄らしい内装だった。

そのショーケースの中や壁には、たくさんのちゅら玉らしきものが陳列されていた。

「いいの、探してみてよ。ここのは俺が自慢できるぐらいいやつ揃えてあるから」

伊織君は言った。

「おいおい伊織、彼女か？」

「あ、店長」

男の人がこっちにやってきて、伊織君に話しかけた。

「とりあえずお隣さんの娘さん」

「タラシめ」

そんなやりとりを聞きながら、私はガラスの奥を覗き込んだ。

きれいな、丸いガラス玉。

ピンクや透明、紫とかもあるけど、やっぱり水色が一番きれい。

その中に、なにか黄色っぽい粒々が入ってる。

なんだろう、これ・・・。

「あ、店長。一個欲しいんだけど、暗いところ貸してくれる?」

伊織君は不意に言った。

「パクったらしばくからな」

「しないよ」

むつとした顔で、伊織君は否定した。

そしてこっちを振り返って、

「どれにする？　今は色重視で。まだ買わないから」

「あ、ほなこのライトブルー」

すると、伊織君はしゃーっとショーガラスを開けた。

「えええええええ！？」

「静かに。パクったりしないよ」

それを取って、さらに私の手もつかんで店の奥へと歩いた。

「い、伊織君？」

「うーん、この辺でいいかな」

私の声を無視して、伊織君はなにかを勝手に決めた。

「これ、見て」

さっきのペンダントのペンダントトップを伊織君自身の手で覆った。

「？」

「覗いて。ほら」

ずい、と手を突き出してきた。

言われるままに手の隙間を覗き込んだ。

「・・・あ！」

「な、いいだろう？　これが俺の御用達理由」

手の中は、ほのかな光に包まれていた。

「きれい・・・」

「どう？　さっきのキューピーより断然いいと思わない？」

「思う！！」

目も、きつと輝いていたに違いない。

それほど、きれいな光景だった。

「その粒々が、蓄光するんやね？」

「当たり前。それがちゅら玉の特徴」

にかつと、今度はどっちかと言うと少年じゃなくて最後の晩餐のマグダラのマリアみたいに笑った。

結局、買ったのはそのペンダントだった。

キーホルダーも可愛かったけど、やっぱりこれの感動は計り知れないものだった。

値段は教えてくれなかった。

値札とか一切ついてなくて、わからなかったけど、かなり高いものなんだなあと思った。

そもそもペンダント自体が高いし、ましてや沖縄のお土産物屋さんの商品。

安い訳がない。

なのに、惜しみもせず出してくれた。

自分で払うって言っても、絶対にやだね、と聞いてくれなかった。

優しいのに、案外照れ屋さんだってわかった。

「ありがとう」

私は帰り道、笑いながら言った。

「……どういたしまして」

そこで、うん？ と気が付いた。

「なあ、顔赤い??」

ひょいっと伊織君の顔を覗き込んだ。

するとふいっとあっちを向いてしまった。

「……日焼けだよ」

七月二十七日（月）変化の兆し

ぴぴぴ。

目覚ましがうるさく鳴る。

「あ——・・・ん」

私は起きた。

頭の上を探った。

まだうるさいのに、どこにいるのか掴めない。

「んー・・・あ・・・」

目覚ましの場所がわかったのは、時計がひとりでにストップしたからだった。

むく、と顔を起こした先には顔。

「おはよう、美穂ちゃん」

「・・・おとーさん？」

「いや、お父さんになった記憶はないよ？」

伊織君だった。

「なんやあ、伊織君が持ってたんやね？」

パンをかじった。

「気付いてなかったんだ？」

「当然やろ？ 寝てたんやから」

お父さんが仕事だから、と伊織君に頼んだらしい。

微笑む伊織君に、心臓がはねた。

「今日はどうしたい？」

伊織君は身を乗り出した。

その瞬間、伊織君のにおいがふわんと香る。

なにかの香り。

また、心臓がとくんと言う。

「あ、えっと・・・」

思わずたじろいだ。

「ん？」

「・・・散歩したい」

「じゃあ、俺の中学校までのコース歩こうか」

食べ終わった私はミュールを履いて、私は外に出た。

「行こか」

「・・・美穂ちゃん、靴大丈夫？」

心配そうに覗き込む。

そんな顔にまでときめく。

「いけるいける。シューズないし」

昨日も履いてたし、と笑う。

「・・・じゃあいいけど、痛くなったら言ってね？」

「うん」

「へえ、本読むんだ」

歩きながら、そんな話になった。

「うん、小説。マンガもだけど、やっぱり小説やなあ」

「なにが好き？」

「恋とか、ノンフィクションとか」

「なんでも読むんだ？」

そんな話をしていたら、呼び止められた。

「おう、大城！」

後ろには、誰かがいた。

「・・・ああ。みしま三島」

そばにいる何人かの男女も、明らかに同い年だった。

彼らの登場は、伊織君の表情を変えた。

「なんだよ、彼女か？ 見かけねー顔だし、意外だな」

後ろにいた一人が言う。

「なにがだ？」

すました顔で、平然と訊き返した。

「お前みたいなのやつが、彼女いるなんて」

また違う男が言った。

「ほんとね。なんだか意外。違うって言って？」

「違います！ 彼女じゃないです」

標準語で答えた。

「なに言っただ、美穂」

呼び捨てて私を見た。

そして、・・・。

視界から消えた。

とくん。

「・・・伊織君？」

私はぽつりと言った。

視界が消えた、の間違いか。

周りが、きゃあと喚いてる。

お、おい、なんて声も聞こえた。

その声は聞こえる。

だけど、わからない。

状況が、一切読めなかった。

前が、見えない。

ただただ目の前に広がる、紺とか白とか緑ラインのギンガムチェック。

それは、見覚えのある色彩。

とくん。

脳に現実が帰ってきたとき、状況は察せた。

それは、伊織君の羽織ってた上着だった。

「い、伊織君・・・？」

もう一度、つぶやく。

とくん。

さらにありえない現実には、目の前で繰り広げられた。

「・・・悪いけど、俺は美穂とデートしてんの」

・・・はい？

意味わかんないんですけど伊織くん。

デートですか？

散歩だった気が・・・ってちがーう！

必死に頭の中を切り替える。

とくん。

さっきからうるさい心臓が、もう伊織君にバレそうなほど高鳴る。

「だからさ、邪魔しないで？ こいつと俺、遠距離なんで」

伊織君はさらに言う。

「え、でも、彼女いないって言ってなかった？」

誰か女の子は言った。

「そんなの、言うわけないでしょ。こいつはさらし者にしたくないし」

「なんか、キャラ違う。おかしいよ、伊織君」

また誰かが言う。

「いつも、もっとカッコいいじゃない」

「それは、あんたが作った幻想だろ？」

フツとバカにしたような笑いだった。

昨日とは違う伊織君がいる。

もうそれだけで、ドキドキは止まってくれなかった。

「さて、美穂ちゃん。突然ゴメンね？ 呼び捨てして」

数分後、伊織君はやっと離してくれた。

まだ心臓はうるさい。

なんで、こんなに変になったのかはわからないけど、ときめきがなにかを教えてくれた。

「大丈夫やよ。一瞬ドキッとしたけど」

「俺に惚れた？」

いきなり核心突かれた。

なのに、なにも動揺せず、

「さあ、どーかな？ 軽い男に格下げしたんやない？」

「えええ、ひどくないか？」

がーん、という顔をもらに出す。

「全然。でも、学校ではキャラ違うんやね？」

こっちだって、核心を突いた。

「まあね。面白いから」

伊織君はそう言ったけど、
なんだかはぐらかされた感じがしないでも
なかった。

七月二十八日（火）気付いたことは

朝。

今日こそはお父さんは隣にいた。

伊織君の方は、クラブの引退前に休めない、と学校へ向かったそう
だ。

だから、今日は家にいることにした。

昨日の一件。

伊織君にドキドキしっぱなしだった。

ときめきが、まだ残ってる。

抱きしめられたときの移り香が、まだ染み付いてる。

伊織君を好きな気持ちだが、恋をしたこともないのにズキッて伝わってきた。

変にドキドキして。

妙に赤くなって。

変。

それはわかってる。

こんな考えてるって、ちょっと変態だよ。

でも、止まんない。

これが、恋？

それとも、なに？

誰か教えてよ。

伊織君に、嫌われない方法。

誰かちょうだい？

伊織君に、告白できる勇気を。

七月二十九日（水）決心した乙女

晴れた広い空。

沖縄の空は、いつになく青い。

そう見えるだけ？

いつも、見えてなかっただけ？

あなたの心も、見えてなかっただけ？

今、晩御飯を一緒にしていた。

伊織君ちにお邪魔して、焼肉をやっていた。

「外でやりたいけどね」

おばさんは言った。

「うちの、皆酔っちゃうから後が大変なんだよ」

くすくす、とあきれたような笑い声を上げた。

「母さんが弱すぎるんだ」

いい感じに焼けたお肉を箸でつまみながら、伊織君はさらっと言った。

「そういうことは二十歳になってから言いな」

おばさん、猛反論。

「あ、おばさん、そのキャベツとってください」

なんとかその場を治めた。

「母さん、じゃあ、アイス買ってくるわ」

伊織君はほろ酔い状態のおばさんたちを家に残して、私を連れて外に出た。

「この先にコンビニがあるんだ」

そう言って、なにもないかのように私の手を引いた。

その瞬間、ドキッとした。

ドキドキして来た反面、優しくしないで、と意地悪が出てきた。

彼女じゃないの。

思わせぶりなことしないで。

好きでもないのなら、そういうのはやめて。

そうやって、私の告白した瞬間の傷つく顔が見たいの？

どんどん、汚いのが出てきた。

戦ってるうち、コンビニの中に入った。

伝える。

その瞬間、そう決めた。

傷つくかもしれない。

泣くかもしれない。

笑えなくなるかもしれない。

だけど、伝えたい。

溢れたこの想いを。

愛してるじゃ重いから。

好き、って。

簡潔に伝える。

戦ったら、気付いた。

恋してなきや、こんなものと戦ってないってことに。

コンビニから出て。

私はハーゲンダッツとガリガリ君、伊織君はパピコとピノとアイスの実を持って、蒸される外気に触れた。

少し歩いて、コンビニからも家からも離れた坂の途中で、私は止まった。

「なあ、伊織君？」

突然止まったことに驚いたのか、びっくりしたようにとどまった。

「なに、美穂ちゃん」

「言いたかったん、さっきから」

何故か口がつつかえる。

緊張して、倒置法になった。

「あんな、私、伊織君のことがす

「待って」

唐突に止められた。

「え・・・？」

「それ、明日まで待って」

それが、伊織君の本心だったんだろうか。

期待した私が嫌になる。

抱きしめてくれたから、調子に乗った？

とにかく、それが伊織君の返事だった。

七月三十日 (木) 彼の本音

朝が来た。

沖縄で、初めて憂鬱になった。

『明日まで待つて』

待つって、なに？

すぐに返事して・・・。

なんで、あんなに即答したの？

私、嫌い・・・？

じゃあ、あんな思わせぶったことしないで。

うれしかったのに、うれしかったのに。

ピンポン。

チャイムが鳴った。

「はい」

がちゃ、と外も確認せずに開けた。

閉めたくなった。

閉めようとした。

「待って!!」

がっ、とドアを掴んだのは、伊織君だった。

「話、聞いて・・・」

伊織君は言った。

「・・・外、いこ・・・お父さん、いてるから」

私は、外へ出た。

「・・・昨日は、さえぎられて、正直嫌やった」

私は本音を言った。

「ゴメン、美穂ちゃん」

「・・・」

少し、間が開いた。

「でも、俺は、俺が言いたかったから」

「・・・はい？」

「俺が、言いたかったんだ・・・女の子に、言わせたくないから」

「いや、空気読めません・・・」

「だから、俺が言いたいんだ」

「なにを？」

「告白」

「はあ・・・」

初めて来た高校で、いきなりクラブ勧誘されてる感じだった。

「・・・美穂ちゃん、日本語理解しよう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・今、
した」

「じゃあ、言ってもいいかな」

少し、深呼吸をしてから伊織君は一言、簡潔に言った。

「好きなんだ、美穂ちゃん」

その後の私は、皆さんのご想像にお任せしたい。

七月三十一日（金）チョコレートの空気が

翌朝。

「美穂、起きろ」

「・・・んあ・・・あと五分、おとーさ・・・」

「誰がお父さんだ」

「・・・くあ？」

「くあでもない・・・またお父さんネタか？」

「あー、伊織君やあ・・・おっはー・・・あ」

「だから起きろって、美穂。朝もいいとこだよ」

「うんー、起こして」

「起きてるじゃん」

「うふふー」

「意味わかんねーよ、起きろって」

脳内チャージ中。

エンジン作動まであと一分十四秒。

空気解読まであと三十秒。

「いーおりくーん」

「ん？」

「・・・もっかい・・・」

「なにを!?!」

「なにつて・・・」

「え、まさか夜の続き!？」

「それもだけど」

「も、つてなに!??」

チャージ完了。

エンジン作動開始。

「つて私なに言ってるね——ん!?!?!?!?!」

「こっちが聞きたいわ——!?!?!」

二人とも真っ赤になりながら言った。

その弾み、昨日のことを思い出した。

昨日は、告白されてそのままどちらともなくキスして、そのまま・・・。

きゃああ————、と叫びたくなるのをぐっところえた。

「ここ、どこなん？」

私は唐突に言った。

「ここ？ 美穂の家じゃん」

じゃあ、妙なのが一つ。

「お父さんは？」

「向こうで酔っ払ったまま雑魚寝してる」

「・・・なんか、口調違う」

ふと気付いた。

「こっちが素」

けろっと言った。

「そうなの？」

「こっちの方がしゃべるの楽。それに、妙に軽い奴、くつついてこないから」

ぱちんとウインク。

「それ、偏見やと思うよ・・・」

私はあきれて言った。

「朝ごはん、作るな？」

私は言った。

「あ、俺パン派」

耳に届いてきた、愛しい声。

「トースト？ サンドイッチ？」

「トースト。ジャムがあつたらいいな」

「ない」

・
・
・。

「ちえ」

「・・・あ、ゴメン、言い方、きつかった、かもしれん・・・」

悲しそうな、微妙な顔つきになった伊織君に、思わず謝った。

「だいじょぶ。やこつか、パン。あと、コーヒーも欲しい」

「う、うん」

さくり、とマーガリンを塗ったパンにかじりつく。

「・・・おいし」

「うん、そやね」

別に市販のパンなんだけどな、と思いつつ、やっぱりかじりつく。

「なあ、美穂」

突然、話を振ってきた。

「なん？ 伊織君」

そして、伊織君の微妙な顔が、ジャムがなかったからじゃなかったことを知った。

「美穂、いつあっちに帰る？」

「・・・え？」

「や、ちょっと、聞きたかったから・・・気にしたら、ゴメン」

「・・・帰るのは、明日。お見送り、来てくれるん？」

「うん、まあ・・・」

居心地、悪い。

寂しい。

「私、ここにおりたい」

唐突に本音を言ってみた。

「でも、そんな勝手なことできひんし、受験あるし、帰らなあかんのは身にしみてる。だから、私は帰る」

「うん」

相槌を打ちながら、耳をすませてくれた。

「でも、私は伊織君好き。一緒におりたいけど、遠距離でもかまへん？」

私は、ずっと、それが聞きたかった。

返事は早かった。

「それぐらい、覚悟してた」

「・・・ほな、遠恋でもかまへんの・・・？」

当然だろ、と、伊織君は返した。

「・・・なな、伊織君」

私は、少しねだってみることにした。

「キスして」

その瞬間、伊織君は。

「テーブルが、邪魔」

「はい？」

「いや、だから、そっち行っても、いい？」

「かまへん、けど」

すると、伊織君は立ち上がってすたすたとそばまでやってきて言った。

「キスしたら、お返しに愛してるって言ってよ」

「・・・伊織君、Sやったん・・・？」

「もちろん」

くっくつと笑って、伊織君は優しく甘いチョコのようなキスをした。

・
・
・。

・
・
・。

長い。

い、息が・・・。

できない・・・。

止めていたわけじゃないけれど。

そうしてから、長いキスを終わらせた伊織君は、お返しをねだってきた。

「なにか、愛を囁いてよ」

「・・・基本的に、どSってゆうよりもむしろ、SUSだったんだね、伊織君」

私は言った。

「SUSってのは聞いたことないよ？」

「訳すと、“スーパーウルトラサディスト”」

出逢った頃とは正反対の、意地悪な視線で言った。

「じゃ、美穂はSSSだ」

間をおいて、

「“スーパースペシャルサディスト”」

「なに、この話題は」

くすくすと二人して笑った。

それは、幸せゆえの意味不明。

「明日、もう帰るんだな、美穂」

「うん、伊織君」

「でも、また会えるよ」

ケータイもあるし、手紙もあるし、電話だってある。

「そうや、伊織君」

私は思い出して言った。

「明日な、十一時八分の102便に乗るんよ。102ってな、語呂合わせでイオリになるんやで！」

「なんじゃそら」

伊織君は言った。

「えー、でもさあ、運命的やない？ 伊織君に包まれて飛ぶんやで？」

はいはい、と適当に聞き流した伊織君は、

「美穂、あのさ、」

「なに、伊織君」

「明日、渡したいものあるから」

「・・・お土産？」

「かもな」

なにそれ、と私は言った。

「なあ、伊織君、今言うのは早いんかもしれんけど」

言ってしまったかった。

「大好き、伊織君」

伊織君のまぶしい笑顔を見つめながら、私は言った。

私は、予感してたのかも知れない。

すべてが————。

八月二日 (土) 七日間の楽園

ぴんぽん。

「おはようございます、大城さん」

「あ、おはよう、美穂ちゃん。ごめんなさいね、来させちゃって」

おばさんだった。

「いえ、こちらこそすみません。空港まで送っていただけるとはなんて」

「それぐらい当然よ」

にこにことまばゆい笑顔で、おばさんは笑った。

「さ、行きましょうか、美穂ちゃん」

「はい、おばさん」

私たちは、車に乗り込んだ。

「ねえ、美穂ちゃん？」

「なんでしよう、おばさん」

運転しながらのことだった。

「これからも、あの子のこと、よろしくね。あんな子だけど」

「・・・おばさん」

知ってらしたんですか。

でも、それはあえて言わなかった。

こんな私を、認めてくれた。

それが、うれしかったから。

「さ、着いたわ。中で、あの子、待ってるから。私はここまで」

おばさんは言った。

「・・・ありがとうございます」

「また、きっと会いましょうね。待ってるから」

「はい、おばさん」

私は、誓った。

きっと、もう一度、ここに来るって。

伊織君と、二人で。

お付き合いさせていただいてます、とか。

結婚します、とか。

なにか理由をつけて。

きっと、戻ってくる。

そう、心に、誓った。

・・・誓った。

ひんやりした、空気。

一週間前と、そんなに変わらない空気。

だけど、違うとあえて言うなら・・・。

そこに、彼氏がいることだった。

「伊織君」

私は呼んだ。

「早かったね、美穂」

「そう？」

ふわっと、自然なつもりで微笑んだ。

「渡したいものがあるんだ、美穂」

伊織君は言った。

「昨日も言ってたやん。なんなん？」

ドキッとした。

急に、そんな顔するから。

真剣に、見つめられて。

「これ、やる」

そう言って渡されたのは、少し長い箱。

「？　なに、これ」

「開けてみるよ」

にやっと、笑った。

意地悪にも見えるし、ただの照れ隠しにも見える。

そんな、微妙な笑み。

「・・・」

シュル。

カサカサ。

すし。

紙を剥いで、現れた箱を開けると。

「え、うそ・・・」

「嘘なんかつくかよ、馬鹿」

恥ずかしかったんだぞ、それ買うの、と伊織君は言った。

その言葉は耳になかなか入らなかった。

中身は、大きなちゅら玉だった。

といっても、この間のととは全然違う。

「それ、蓄光しないやつ。茶色で悪いけど、それが一番似合うと思うって」

「うん、うん・・・！」

そう言って、私は抱きついた。

耳元で囁く。

「ありがと、伊織君」

そうして、私は、沖縄を、離れた。

＊

「また会おうな、美穂」

俺は、確かに言った。

「お待たせ、母さん」

見送ってから、外で待っていた母さんの車に乗り込んで、俺は言った。

「な、ラジオ聞いていい？」

「いいわよ？」

MDから、ラジオ放送に切り替える。

今、昼十一時半。

もう、美穂は海の上。

蒼い海。

きらきらと輝くエメラルドグリーンの上を、軽やかに滑ってるんだろう。

そんな中、俺たちは那覇の混雑した日曜の道を走り抜けていた。

さっきまで流れていたラジオ番組が、ニュースの時間を迎えた。

“ニュースをお伝えします。今日午前十一時八分那覇空港発、関西空港行きのANA102便が、飛行中、空中爆発を起こしました”

『明日な、十一時八分の102便に乗るんよ。102ってな、語呂合わせでイオリになるんやで!』

“詳しい原因については、現在捜査中だという事です”

『運命的やない? 伊織君に包まれて飛ぶんやで?』

“また、乗客乗務員の安否は今のところ不明ですが、事故の状況からしてほぼ壊滅的だという事です”

『大好き、伊織君』

「――み、ほ――・・・・・・・・」

F i n

あとがきの楽園

ここまで読んでくださった皆様、ここしか読んでおられない方ももちろんいらっしやると思いますが（私がそもそもそういうタイプなんです）、ありがとうございました。

最初から読んでくださった方にまず少し。

私の初完成作品、いかがでしたでしょうか？

納得されない方もいらっしやると思います。

ですが、私はあれが、七日間の楽園だと思いました。

楽園だった日々。

そうでは、ありませんでしたでしょうか？

次に、あとがき派の皆様に。

ぜひ、読んでください。

私が、一体どういう女なのか、わかっていただけたと思います。

今回のこの七日間の楽園は、かなり読みやすいと思われます。

（行間とか特に）

ぜひ、これだけでも読んでください。

多分、15分もあれば読んでしまえると思います。

そうしたら、感想等お願いしたいです。（下心丸出し）

ちなみに、続編があります。

「七日間の花園」（仮）です。

だから中途半端に終わっているのにも意味がありますので、どうか蝶々の未熟さを認めて、あるいはスルーしておいてください。

これに関しては、かなり中傷が殺到するだろうと思います。

たとえしなくても、思う人はたくさんいることでしょう。

「人の命をなんだと思ってる!？」

なんていうのが、たくさんあると思います。

ですが、私は、これを書かないといけないと思ったから、書きました。

私自身が、大切な人を見失ったからこそ、書けたのだろうと信じています。

また、こんな場面に出会えるということも信じています。

では、またいつか、どこかで。

あとがきの楽園（後書き）

追記..

この作品は、2009年6月3日から7月12日まで蝶々が違うハンドルネームで他サイトにて執筆した処女作に当たります。

移転にあたり、この作品も持ってきた次第です。

未熟だしあとがきはヨレヨレだしもうなにがなんやらな作品ですが、ご一読いただけたら幸いです。

上記の通り、続編がございますので、そちらも読んでください（下心満載）

永遠の七日間 第二章 七日間の花園

変わった世界。

進んでいく時間。

取り残される自分。

巡る季節。

きっと俺は、どこでもないところに立っている。

十年は長い。

十年は早い。

十年は遠い。

君は彼方へ去った。

逢いたい。

逢えない。

帰りたい。

帰れない。

さよならも言えぬまま。

あの日言えばよかった。

行くな。

俺のそばにいろ。

離れるな。

嫌なら俺が行く。

わがままを言えばよかった。

どうして。

どうして。

君だけが、逝ってしまったんだ。

好きだ。

好きだ。

全力で叫べよかった。

君だけが、俺は欲しかったんだ。

———七日間の花園

七月二十六日（金）十年の闇

『伊織君、大好き』

それは、遠い日の記憶。

「伊織^{いおり}君！」

後ろから女性の声が聞こえた。

「み・・・」

思わず、間違えそうになった。

「じゃなかった、藤原さん」

「み、って誰よ？ あたしの名前にみは入ってないわよ、藤原^{ふじわら}由香^{ゆか}子^{かこ}だもん」

なにと間違えた？ と問いただしてくる。

「あ、いや・・・」

思わず目をそらす。

言いたくない。

「あ、彼女？ 彼女いるの？ だからガード固いのね？」

ぼやっとオーラが黒くなった。

「いっつもいっつも合コンも飲み会も断ってくるけど、そんな彼女独占欲強いのか？」

「いえ彼女いませんから」

さっと前に手を出す。

「なによ、じゃあなんで断んのよ」

同期とはいえ、口使いが荒い。

先輩後輩の関係じゃなく、単に女性としての言葉遣いを注意したい。

「では、また明日、藤原さん」

「あっ待てこら」

俺は、彼女をまったく無視してすたこらと去った。

＊

「もう、ほんとにガード固いわ」

ぶんぶん、と可愛く怒る。

「いいじゃないですか、藤原さん。居酒屋は僕ら二人で行きましよう」

「つまんないから嫌」

「ひどいですよ。ライフポイントゼロです」

「じゃあ行き倒れときなさい、河原君」

同じく同期の河原卓也^{かわはらたくや}に言った。

「いや見捨てないでください」

「相手があんただったら見捨てたくなるわよ」

「ひどいです藤原さん」

「暑苦しい抱きつくな彼氏でもないくせにこの野郎離れるバカたれ
このツラだけ良し男」

私は思いつく限りの悪態をついた。

「××××野郎このドMなよなよしてるくせにこの大魔神×××め
×××ちっこい癖に」

「なんでそんなこと知ってんですか」

ぎゃあ、とうめき声を上げた。

ついでに腕から抜けておく。

「ってそんなのどうでもいいのよ」

「僕にはよくないです。プライドの危機です」

「あんたに守るほど大きなプライドないでしょ」

「いやありますよ」

「またそれだ。伊織君・・・大城君^{おおしろ}、なんであんなに固いのかしら」

「なんかあるんでしょう。人に知られたくないこととか」

「い、まさか家でAV見たいから早く帰るとか・・・」

きゃああ伊織君の理想が崩れるう、とわめいてみる。

発想がどんどん飛躍していくな・・・。

可哀想な大城。

河原は思った。

＊

『み、ほ———・・・』

あれから、十年が経った。

というか、知らない間に十年が経っていた。

知らない間に二十五になっていた。

十年前にあんな事故があったことも、もう誰も憶えていないだろう。

悲惨な事故なのに、所詮はそんなものらしい。

美穂のことを、片時も忘れたことはなかった。

頭から離れてくれなかったし、離れてくれとも思わなかった。

ただ、そばにずっといて欲しかった。

『遠距離でもかまへん？』

あの時、嫌だ、そばにいろよって言えばよかった。

いっそ、俺もついてくよって言えばよかった。

なら、一緒に死ねたのに。

一緒に、いられたのに。

今まで美穂以外に付き合った奴はいなかった。

この性格か、それとも顔か、告白して来た奴はいたけど、全部ことごとく断った。

愛してるのは、美穂だけだから。

美穂だけを、愛しているから。

それは、罪だったのか？

だから、引き離されたのだろうか。

織姫と彦星でさえ、一年に一度は逢瀬の時が来る。

俺たちには、十年経っても来ない。

何故。

何故、神様は俺ではなく美穂を殺めたのだろうか。

シャッ・・・。

家についてすぐ、カーテンを閉める。

いっそ、ずっと閉めっぱなしにしておきたい。

外なんか見たくない。

空が、空が・・・。

蒼い空が、美穂は死んだんだよって・・・もうわかってることを言ってくる。

言うな。

そう言ってるのに。

認めたくないんでしょ？

ああそうさ、と叫びたくなる。

いつそ、叫ばせてくれ。

・・・傍に、いて欲しかった。

ずっと、一緒に道を歩むつもりだったんだ。

十年前、こうなるとわかっていたのなら。

俺は、死んでも美穂を離さなかっただろう。

行くな。

行かないで。

一緒にいろよ。

そばにいろよ。

ずっと・・・俺の隣にいろよ。

そう言って、嵐のようなキスをして、俺から離れられないようにしたかった。

激しすぎるかもしれないけど・・・。

好きだったんだ。

ホントに、好きだったんだ・・・。

あの後。

葬式に行ったかどうかすら、もう憶えていない。

それぐらいショックだった。

記憶があるのは、四十九日が過ぎてからだった。

初めて、美穂の墓へ行った。

本土にあって、美穂のように飛行機で一人大阪まで行った。

初めての大阪。

はたからみたら普通の旅行だけど、心はすさみ切っていた気がする。

墓の前ではただ泣いた。

美穂のお経も知らないし、なんて言ったらいいかもわからなくて、ただ泣いた。

『・・・み、穂お・・・！！！！！！』

ぱたぱたとこぼれてゆく。

線香もつけず、墓石の上に美穂がいるかのように泣いた。

墓石を抱き締めんばかりに泣いた。

それからは毎年、美穂の命日前からお盆までを大阪のホテルで過ごしている。

美穂の実家に行くのはあまりにも厚かましいし、もう俺の顔も見たくないはずだ。

今年も、もうそろそろ荷造りをする必要があった。

というか飛行機は明日の早朝だった。

「あ、藤原さん、もしかして俺今年も大阪行くなって訊いてなかったのかな」

毎年、同じ日に行って同じ日から仕事を再開するから、知っていると思ってたな・・・。

ゴメン藤原さん、今年も河原とお盆を過ごしてくれ。

七月二十七日（土）久しぶりの再会

朝。

沖縄、那覇空港から飛行機で二時間ほどの距離にある大阪、関西国際空港。

俺は一年ぶりのここに降り立った。

朝十時過ぎ。

ごおごおお、とカバンのキャスターが鳴く。

いつも、ここは変わらない。

忘れたくて会社は休みなしで働いているけれど、ここにきたらそんなことお構いなしにまざまざと思い出してくる。

あ、ケータイの電源、と思いオンにすると、案の定藤原さんからメールがあった。

彼女達とは高校からの友人で、大学で離れたらもうほとんど会うことはねえよなと全員で話した四年後に同じ会社を就職していた。

謀ったかと思っただが、まったくの偶然らしい。

河原は藤原さんに合わせたらしいが。

“Title…今朝”

おお、顔文字絵文字デコレーションなしだ。

珍しい。

“ちょっと、どういうつもり？ また今年も有給取ってたなんて聞いてないわよ？ 沖縄育ち沖縄在住のあんたがまったく無縁な大阪になんで毎年行ってるのかは知らないけど、帰ってきたら覚悟しなさい”

おおうこえええ。

着信は朝の八時少し前。

残念ながら電源を落とした数秒後だったようだ。

そこから、二十分おきに着信していた。

内数件は河原からだった。

「河原にも教えてなかったっけ？」

あれ、とメールを開く。

“Title…てめえ”

あ、ヤバイ。

“てめえ帰ってきたら覚悟しとけ。確かにあいつは好きだがてめえのいねえ七日間だけは毎年俺は失踪してんだよ。てめえいなかったらあいつの暴走のストップ男はいないんだぜ！？ 行くんだったら最初っから言っとけこの馬鹿野郎”

・・・か、帰れねえよダブルパンチめ・・・。

とにかく、ぱちんとケータイを閉じて外へ出る。

むあつとした空気。

沖縄のほうが一見暑いように思われることが多い。

日差しは確かに沖縄のほうが暑いしきついものの、気温は間違いなく大阪のほうが高い。

陰に入れば沖縄はある程度は涼しいのだ。

「さて、ホテル行くか」

移動手段・・・、とつぶやきながら高くても大荷物では楽ちんなタクシーを探した。

「久しぶり・・・」

墓の前で、美穂と言葉を交わした。

もちろん、そこに美穂はいないけれど。

でも、いる。

気が狂ったわけじゃない。

だって、墓ってそういうもんだろ？

「なあ、美穂・・・」

愛してるなんて言葉・・・。

もう、美穂には届かないのに。

「一年振りか・・・。薄情でゴメン」

仕事で来れなかったなんて、男の常套文句。

きつと、美穂は怒って、

「なんよ、言い訳しいなや。白状しい？ 浮気したやろ」

なんて言っつて頬をつねるかな？

もちろん、それは生きていたらの話で。

もう、もう。

「美穂・・・お前がいなくなって、十年だぜ？」

ぶわっ・・・。

一陣の風が吹く。

少し無造作に伸びてしまった髪がなびく。

「美穂・・・この期に及んで悪いけど」

くしゃ、と髪を握り締めた。

「愛してる」

まるでそこに美穂がいるみたいに、俺は囁いた。

それから、それはいろんな話をした。

まだ彼女は出来てないこと。

同僚はまだ藤原さんにデレデレなこと。

それに対して藤原さんはツンデレなこと。

たくさん話をした。

気が付けば、夏の大阪の空が赤くなり始めていた。

「あ、俺、帰るな。また来る」

そう言って、手を振った。

七月二十八日（日）永遠なんか信じない

今日は、ホテルでのんびりすることにした。

美穂に縁のありそうなところは、もうこの十年ですべて回った。

公園。

学校。

桜並木。

丘。

実家も近くまでなら行った。

全部回った。

それで、美穂が帰ってくるわけじゃないけど。

まだ立ち直ってへんの？

さっさと立ちいよ、ほら！

もし生きてたら、そう言われそうだけど。

好きだったことに変わりはない。

たった七日間。

されど七日間。

俺のあのガキの頃の七日間で、恋愛運は尽きた。

別に出逢いがなかった訳じゃない。

ただ、美穂を越えてくれる女がいらないだけ。

もちろん、理不尽な話。

まだ俺の中に美穂がいるから、忘れられないし、越えられない。

俺の中では、やっぱりまだ美穂が生きてるんだ・・・。

七月二十九日（月）愛してる

こんなにむなしい大阪は初めてだった。

あたりは、カップルが歩いている。

幸せそうに笑って、甘いこと囁いて。

独りなのは、俺だけ。

美穂が生きているなら。

そんな、甘くないことを知っていても、考えてしまう。

美穂、美穂。

会いたい。

大阪まで来たのに、会えない。

話がしたい。

愛してるって叫びたい。

顔が見たいって甘えたい。

でも、そう思うたびに出来ないって思い知らされるから。

・・・美穂・・・。

もう、帰ろうか、と思った。

飛行機はいつそキャンセルして、今すぐ新幹線で帰ろうか。

そう思った。

・・・美穂のお母さん達に会うまでは。

月曜日なのに、カップルが多いなと思いながら一人、寂しく歩いて
いたとき。

「・・・あれ、伊織君？」

聞き覚えのある声がした。

とっさに、彼女だと思った。

こんなにむなしい思いをさせる、それでも愛しいあの子だと思った。

「伊織君ちやう？　ちやうかったらごめんなさいねえ、美穂の？」

おばさんだった。

それも、美穂の・・・。

「あ、ご無沙汰してます・・・」

「やっぱり伊織君やねえ？　毎年来てくれてるんやろ？」

おばさんは言い当てた。

「え、あ、どうしてそれを・・・」

「寺の人が言うてくれはるんよ。今年も来てたで、あの沖縄の兄ちゃん、て」

にこお、とどこか美穂を思い出させる笑み。

「あ、すみません、毎年そちらにお邪魔できなくて・・・」

「わざと、ちゃうん？」

「・・・」

「ま、積もる話もあるし、うちへおいなあ」

言われるがまま。

「・・・って、ゴメン、今日はあかんわあ。これからちよつと出る用事あんのよ」

あー悔しいっと言わんばかりにぱちんと手を叩く。

「明日もいてるん？」

「あ、はい」

「ほな、明日、うちへおいで。うち知ってるやろ？ 何時でもかまへんよ。夜中でもええし、朝でも、昼でも」

ほなっゴメンなあ、とおばさんは嵐のように去った。

七月三十日 (火) もう戻らない日々

朝十一時半。

「あらあ、いらっしやい。よう来たねえ」

郊外にある少し大きな一軒家が、かみやま神山家。

「あ、すみません・・・電車が混んじやって、乗れなくて」

「ああ、沖縄にはモノレールしかないから、通勤ラッシュがねえ・・・」

くすくすと笑った。

「そんなん、無理に押し込んじゃえばいいんよ」

あっはっはと大きく笑うおばさん。

無茶だ。

定員スペシャルオーバーで電車が沈む。

「あなたあ、伊織君！ 来たでえ」

「ン、やっと来たか」

奥からおじさんが出てきた。

「久しぶりやなあ大城君。そっちへ行けんですまんかったなあ」

「あ、いえ、そんな。それはこっちです。すみません、ご無沙汰してしまって」

「かまんよ。来にくかったんやろ。美穂がまだおるみたいな空気と、俺らで」

寂しいような顔をする。

「・・・すみません」

「なによお、辛気臭い顔してえ。ほら、昼食べよ」

おばさんが俺の背中を押す。

「あとで、いいところ連れてったげる」

にこ、と企んでいる顔をした。

お昼は、お好み焼きだった。

「こっち来たとき、もう食べたんかなあ」

おばさんは、うーんとなにか思案した。

「あ、いえ、いつも大体ホテル食とか、たこ焼きとか、串かつとか・
・・」

「ああ、そうなんや。お好みは食べたことないんやね？」

「はい、一度も・・・」

「もったいないわぁ。うちのはちよつと特殊やから、食べてみ？」

と、箸で食べた。

「・・・」

「どないしたん？不味い？」

おばさんが覗き込んできた。

「いえ、あーっと・・・こてで、食べないのかと・・・」

「は？」

こて？ と目を点にするおじさん。

「その、・・・鉄板返しで」

それ、とお好み焼きをひっくり返すこてを指した。

「そ、そんな知識どこで手に入れたん!？」

あーはははっ、ツボツボ、と笑い転げるおばさん。

「美穂か!？」

おじさんも顔が赤い。

「いえ、テレビで・・・」

「そんなんせーへんて! 今でこそ樹脂とかやけど、昔は鉄製やで!?
危なすぎ!！」

あかん、この子天然! と若い子のように笑った。

「あ・・・そうなんですか・・・」

なんか恥ずかしいな、と顔を俯けた。

食事後。

「ほな、ええとこいこか」

おばさんは言った。

「それって・・・」

どこですか、と訊く口を塞がれた。

「分かってるンちゃうのん？」

にこお、と微笑んだ。

階段を上って、着いたのは扉の前。

「来たこと、ないやろ？」

寂しそうに笑うおばさん。

——M i h o ' s R O O M

白と黒で飾られた、ルームプレート。

「美穂・・・の？」

「当時のままで置いてあるんよ」

かちや、と開けた。

そこには、美穂がいた。

白とブラウン調で整えられたシンプルな部屋。

美穂は、十年前までここにいた。

「なんか欲しいもんあったら、なんでも持っていてな」

おばさんは言った。

「アルバムとか、写真とか、文具類とか色々あるの、見てっただけ」

おばさんはドアを閉めた。

「・・・美穂・・・」

いまだにそこにいるみたいな感覚だった。

錯覚が、見えそうなほど。

勉強机には、透明のビニールのシートの下に、何枚もの写真が敷かれていた。

卒業式の写真。

家族旅行かなにかの写真。

修学旅行の写真。

夏祭り、花火大会、遊園地でのスナック・・・。

「・・・美穂!!」

名前しか叫べない。

今だって、まだ好きだ。

愛してる。

でも、それを言ったらあっちで美穂が泣くから。

「——っ!」

ぱつり、と落ちる雫。

目をやると————

遺品として見つかったのだろうか。

茶色の、あれがあった。

美穂との最期が、戻ってくる。

『渡したいものがあるんだ、美穂』

『昨日も言ってたやん。なんなん』

ドキッとした。

急に、可愛い顔するから。

真剣に、見つめてきたから。

『開けてみるよ』

『・・・』

黙ったまま、包みを開けた美穂。

シュル。

カサカサ。

すこ。

紙を剥いで、現れた箱を開けた。

『え、うそ・・・』

そう言ったときの美穂は今でも憶えている。

可愛かった。

手が出そうになるのをぐっと堪えなきゃならなかった。

『嘘なんかつくかよ、バカ。恥ずかしかったんだぞ、それ買うの』

照れ隠しだった。

『それが一番似合うと思って』

『うん、うん・・・!』

そう言って、必死で頷く美穂が可愛くて。

手を出したかった。

堪えた俺の努力は水の泡と化した。

美穂は抱きついてきた。

耳元で囁く。

『ありがと、伊織君』

「美穂・・・」

今でも、まだ忘れられない。

でも、もう戻らない美穂。

俺は、そのちゅら玉を握り締めた。

七月三十一日(水) 愛してた

好きだったぜ、美穂。

昨日、神山家を訪れてから、俺の心は軽くなった。

おぼさんたちは、快く受け入れてくれた。

それが、うれしかった。

「なあ、美穂」

目の前の灰色に向かって呟く。

「俺、頑張るよ。頑張って、美穂のことを・・・」

息を吸った。

覚悟を、決めなきゃならない。

「思い出にするから」

そのとき。

一陣の風が吹いた。

世界に、色が返ってきた。

強い、風だった。

仏花は揺れる。

線香の灰も崩れる。

「頑張って、思い出にするから」

もう一度、言った。

ゴメンな、美穂。

本当は、思い出になんかならない。

本当は、思い出になんか出来ない。

けど、歩かなきゃならないとわかったから。

いいよな、美穂・・・。

「勝手に一人で歩いてくけど・・・ゴメンな」

綺麗事だ。

俺は知っていた。

多分、美穂は早く思い出にしたらええのに、って思ってる。

でもその反面、思い出になんかせんといて、とも思ってる。

両方は選べない。

だから・・・でも、ゴメン。

「バイバイじゃないけど」

また来るけど。

俺は、美穂に手を振って、歩き出した。

八月二日 (木) 七日間の花園

飛行機が、来た。

ぽおん、とアナウンスが入る。

「行こうか、美穂」

小声で言った。

美穂は、連れては行かない。

けれど、形だけを連れて行く。

思い出にするために。

笑って、歩けるように。

茶色いちゅら玉を優しく手のひらに包んで、こつと前へ進んだ。

飛行機に乗るときは、いつも墜落すればいいのに、なんて願っていた。

そうしたら、美穂と同じところへ行ける。

同じ方法で行ける。

そう思っていた。

今はもう違う。

絶対に、行かない。

何年か先。

何十年か先。

いつか来るときまでは。

わりい、待たせたな、って手を振るときまでは。

絶対に、死なない。

だって、手のひらにはいつも美穂がいるから。

エピソード 前を向いて

沖縄。

美穂と出逢った場所。

美穂と別れた場所。

キューピーのキーホルダー。

街路樹。

ハイビスカス。

家。

国際通り。

那覇空港。

ちゅら玉。

エメラルドグリーンの透き通る海。

どこに行っても、美穂との思い出がいる。

もう遠いはずなのに、手の届かないところにいるはずなのに。

はい、なんよ？　って声が返ってきそうなところにいる。

大好きな美穂。

あの事故さえなければ、隣で今も微笑んでいたかもしれない美穂。

その美穂が。

隣にいるかのような。

そんなところにいるかのような感覚になる。

けれど、声はかけない。

もう、かけられない。

俺は歩き出した。

後ろなんか見ない。

立ち止まったりもしない。

前だけを、向いて。

F
i
n

あとがきの花園

はい、やっと完成しました。

お待たせしました。

遅くなりました。

伊織君がちょっと待てよと駄々をこねたモンですから・・・。

という言い訳は置いといて。

さて・・・途中で、

「そうしたら、美穂と同じところへ行ける。同じ方法で行ける。」

という記述がありました。

いける、を逝ける、と書かずに行ける、としました。

その理由を、どうかつかみ取ってあげてください。

次に・・・。

けて、軽い気持ちでは書いていません。

前作「七日間の楽園」は当初、ハッピーラブストーリーの予定だったので、少しアップトーンになっています。

しかし、このひと夏の私自身の経験により、がらっと変わっています。

この「花園」はそれに伴ってトーンダウンしています。

だって、沖縄はただ華やかな場所、リゾート地というわけではありませんから。

花園、というのは「伊織君の」という意味ではありません。

「伊織君が」です。

ストーリーの視点的には伊織君目線で展開していますが、題だけは美穂視点です。

この十年苦しみ続けたのは、伊織君だけではないということ。

これは、沖縄の歴史でも通用することなのではないでしょうか。

最後に。

本当にお待たせしました。

やっとかさ公開です。

これから閲覧する人は、どうぞ、ゆっくり見ていってください。

どんな本にも、必ずなにか伝えたいことがあります。

たとえばそれがケータイ小説でも。

あとがきの花園（後書き）

追記..

この作品は、2009年7月13日から9月27日まで他サイトに執筆していた処女作「七日間の楽園」の続編です。

こちら他サイトの方で執筆し、公開していました。

「楽園」と同じく移転の際に持ってきた次第です。もうこちらもしつちやかめつちやかですが、どうかご一読ください。

さらにまだ続編ございますのでそちらも（以下自粛）笑

永遠の七日間 第三章 七日間の公園

噛み付かれた腕。

寂しそうな背中。

遠い目。

あなたはなにを見ていたのだろう。

思い出す記憶。

もう戻らない記憶。

幸せな記憶。

忘れまいと鍵をかけたのはなぜですか。

古き、されど昨日のことのようなその日々。

それを忘れさせなかったのは、なにですか。

恋は巡る。

命も巡る。

運命さえも巡る。

風のようなその循環に、取り残されたのはいつからですか。

耳に残る声。

風にざわめく草木。

見渡す限りの緑。

陽射しを受けるその海。

あの唄は、あなたのなんだったのでしょうか。

忘れはしない。

人の人生を変える恋があること。

その恋に生きる人がいること。

その生を遂げるまで抱く恋があること。

忘れられない、恋があるということ。

なによりも自分を変えるのは、もしかすると恋だということ。

あなたは教えてくれたから。

———七日間の公園

りらの友達ですか？

「来いっりら！ 行くぞ！」

それは、いつもの散歩。

りらは、俺の三歳になる愛犬コーギーだった。

おんっ！

ずどっとタツクルかましてくるりらが、俺は大好きだ。

リードをつけた瞬間、思いっきり走り出すりら。

「速いって！！ りら！！」

猛突進していく。

国道、マンション、図書館・・・。

走った先には、やっぱり・・・。

「あ、じいちゃん!!」

いつもの公園。

そこには、りらを可愛がってくれるじいちゃんがいた。

ベンチに座ったじいちゃんの前で、りらはお座り。

俺に対してはあんなだけハイテンションなのに。

犬の癖に猫かぶってんのか？

「ああ、こんにちは、椎名君。今日も懲りずに来てますよ」

「なんだよ、懲りなくていいよ。いつも来てくれてて、うれしいからさ」

話し相手もいるしさ、とにやっと笑うと、

「・・・話の合わないじいさんですよ」

愚痴るようにささやいた。

「りらちゃん、はい」

かなり高いところで骨ガムをちらつかせる。

おんおんおん!!!!!!

ぴょいん、と跳ねる。

「ガンバ! いけいけりら!」

がぶ。

「つてぎゃああ——!! りら——!!」

腕ごといった。

猛烈にじいさんの腕は飲み込まれつつあった。

「あ、いたい、痛いよりらちゃん？」

わりと平然とした口調。

でも痛いらしい。

涙目。

「あ、じいちゃんゴメン、ほら、りら放せ」

おう——ん・・・。

骨ガムをまむまむしながら、ごめーんみたいに鳴く。

「いいよ。大丈夫、甘咬みだから」

どこが！？

若干食いちぎられてない!？

「ああ、大丈夫ですよ椎名君。ほら」

差し出されたりらに咬まれた腕は、特に傷はなかった。

「・・・ごめん、じいちゃん」

「大丈夫ですよ、ほら」

ぽんぽんと頭を叩いた。

じいちゃんと俺、うさみしいな宇佐美椎名の話は、ここから始まる。

結婚してますか？

いつも、じいちゃんは独りだった。

「な、じいちゃん」

それんも、いつもの公園。

ベンチに座って、りらとじゃれるじいちゃんに向かって声をかけた。

「なんですか？」

「・・・じいちゃんってさ」

「・・・」

「結婚、してねえの？」

「・・・」

「答えなくて、いいよ。無理は禁物だぜ」

「・・・いえ、答えておきましょう・・・ずっと、独身ですよ。一人身です」

「・・・そっか」

「どうしてですか？急に」

「いや・・・」

名も知らない。

住所も知らない。

この街に住んでいるかもわからない。

知らないことだらけのじいちゃんのことを、なにか一つは知っておきたかった。

「なんでもないよ、じいちゃん。変なこと訊いてゴメン」

俺はりらを見つめながら呟いた。

どうして独りなんですか？

また、日は過ぎた。

「な、じいちゃん」

日に日に、俺はじいちゃんのことを知りたくなっていた。

探偵気分とかそんなんじゃない。

友達……りらの、友達として知りたかった。

「なんですか」

じいちゃんも、それを嫌がっているわけではなさそうだった。

「じいちゃんさ」

えー、と、と少し間を開けて。

「・・・なんでさ、結婚しねえの？」

「・・・えっと、ですね・・・」

気まずい間が開いた。

間を埋めるようにおんおんとささやくりら。

嫌なら言わなくていい。

そういう問題ではないらしい。

じいちゃんは、いつもなにかに苦しんでいる感じだった。

特に、ここ最近。

「・・・好きな人が、いるんですよ」

「ほえっ！　そうだったの」

驚いた。

どう考えても七十を過ぎている。

恋って、そんな永遠不滅なものなんだ……。

「ずいぶん昔の話ですけどね」

「へえ……」

信じられなかった。

じいちゃんにも、そういうときがあったんだ。

「もう、叶わないんですがね」

わふ、とりらがつまらなさそうに吠える。

「……なんで？」

「・・・何故だと思いますか？」

「って・・・」

結婚したのか？

それとも、彼女になにかあった？

「結婚・・・なさったのか？」

妙な敬語。

「・・・いいえ」

笑っただけだった。

「明日、教えてあげましょう・・・今は、待ってください」

苦しそうに、微笑んだ。

「・・・言わなくても、いいんだけど」

「・・・・・・・・でも、言わなければならないことかもしれないから」

じいちゃんは、そんなあやふやなことを言った。

ふーん、とりらが構ってくれない主人に甘えようとした。

過去を話せますか？

じいちゃんの言う、明日になった。

「・・・じいちゃん、おはよ」

ふーんと、りらも挨拶。

十分夕方だけど、なんとなくそう言った。

「ああ、おはよう、椎名君」

「・・・いけそう？」

「・・・言えますよ。座って」

そう言って、自分の横を指した。

そこに座る。

りらは相変わらずじいちゃんのひざに乗る。

じいちゃんが口を開くまで待った。

「・・・昔・・・本当に昔です」

「うん」

「昔・・・好きになった人がいました」

「へえ・・・」

でも、今じいちゃんは独りだ。

「ですが、出会ってすぐ、亡くなりました」

衝撃だった。

死んだ？

「原因は・・・事故でした。かなり大きな、飛行機事故」

悲しい、微笑だった。

「好きだったんですよ・・・想いだって、通じ合いました。でも、彼女は去った」

そして、じいちゃんは俺に向き直って言った。

まっすぐ、まるで正直な子供みたいな目だった。

「・・・椎名君には、大切な人がいるかい？」

「・・・いえ、まだ」

十五歳の俺には、まだそういう人はいなかった。

恋愛をしたこともない。

好き、という気持ちをまだ知らない。

「そうですか。もし出逢ったなら、そのときは、彼女について行きなさい」

後悔しないように、ね。

じいちゃんは言った。

「私には、もう一つ、大切なものがあります」

「なに？」

「彼女の、家族でした」

じいちゃんは上を向いた。

「・・・え？」

「彼女が亡くなった当時、怖くて彼女の実家へは足を運べませんでした。ですがその何年か後、偶然お会いして、お話する機会がありました」

「・・・どうなった？」

興味深々で聞いた。

「・・・あの人たちは、何年も、私を待っていてくれたそうです。彼女の部屋を、そのままにして」

「・・・ふうん」

「数年間の間に、引越そうと思えば引越せたんです。いつだつて、彼女の思い出を捨てるために」

けれどしなかった。

「それが、彼らを大切なものとする理由です。僕のために、待って

いてくれたんですから」

その日、じいちゃんは泣きそうな顔で微笑んでいた。

まだ、愛していますか？

「なあ、じいちゃん」

それは、じいちゃんが過去を話した次の日。

「なんででしょう」

「じいちゃんさ、まだ、その人愛してる？」

それは、昨晚ずっと考え続けたことだった。

「・・・ええ」

「忘れ、られないんだ、じいちゃん」

悲しくなった。

置いていかれる、悲しさ。

彼女は年をとらないまま、自分だけが老いていく。

それは悲しいか、と訊くと、意外な答えが返ってきた。

「いいえ」

「・・・なんで？」

「彼女ならきつと、自分で命を絶つと言うでしょう。だから、老いて、老いて老いて老い切って、そうして死んだとき、また彼女に会える」

「だけど」

置いて行かれた悲しみは、消えない。

「悲しくはありません。死を迎えたくないわけでもない。ただ、待っているんですよ」

そうして、じいちゃんは最後に続けた。

「彼女が、迎えに来てくれるのを」

彼女に怒られますか？

「なあ、じいちゃんさ」

おんおん！

にぎやかしくりらが吠える。

「なんですか？」

「・・・結婚、しなかったんだよな」

「ええ」

おん！

りらが吠える。

「それでさ・・・」

言おうか迷った。

今なら、言わずに“なんでもない”で済ませられる。

けれど、あえて突っ込んで言ってみた。

「・・・彼女に、怒られるんじゃない？」

「・・・それは、結構考えました、ですが」

？

「ですが？」

「彼女が残ったまま、違う誰かと結婚なんて、それは相手に失礼ですし」

逆に怒られますから、とじいちゃんは照れたようにはにかんだ。

知っていますか？

「こんな曲を知っていますか？」

じいちゃんは言った。

「なにになに？」

「ざわわ・・・ざわわ・・・ざわわ・・・」

「あ、有名じゃん」

「はい。では、最後、なんという歌詞で終わるか知っていますか？」

「知らないよお、習ってないし、そこしかフレーズ知らないもん」

「じゃあ、教えてあげましょう」

そうして、じいちゃんは歌い始めた。

「風に涙は乾いても」

ざわわ・・・。

「この悲しみは消えない」

「・・・悲しみ？」

俺は言った。

「そう。悲しみ。戦争の悲しみです。何度泣いても、風に乾いていきますが、悲しみだけは乾かない、ずっと染み込んだままと言うことですよ」

「なんか・・・似てるね」

「なにとですか？」

俺は答えた。

「じいちゃんと」

・・・じいちゃんは微笑んだだけだった。

そしてそれが、じいちゃんとの最期の会話だった。

七日間の公園

それから、ぱったりとじいちゃん姿を見せなくなった。

「なあ母さん」

「なあに？」

「最近さあ、じいちゃんが公園に来ないんだよ」

「・・・ああ、あのおじいちゃん？　りらと遊んでくれた？」

かなりの時間を置いて、母さんは返事した。

「そうそう。寂しいよなあ、なんか」

「そりゃあ、仕方ないわよ・・・残念よねえ、末期ガンだったんですって？」

「え？」

「だから、残念ねえって。この間お葬式だったじゃない。知らなかったの？」

「近所じゃない、とも言う。」

「そんなの、知らねえ・・・」

俺は、りらを小屋に残したまま、母さんを放って家を飛び出した。

「椎名!？」

嘘だ。

嘘だよなあ、じいちゃん。

いつもの公園。

「じいちゃん!!!!」

人気のない、殺風景な公園。

「じいちゃ・・・ん・・・」

ぽたぽた流れ落ちる。

涙は、地面の土へと染み込んでいった。

“かぜに・・・なみだーは・・・かわーいても・・・”

ざっ・・・。

“このかなしみはきえない・・・”

じいちゃんの教えてくれた音楽が、頭を流れた。

Fin

あとがきの公園

完結編です。

お待たせしました。

最終の、第三部作目です。

待ち望んでいてくれた人は、指折るほどしかないと思います。

ですが、その指折るほどしかないなくたっていい。

その方たちだけでも、この思いを伝えられたらいいです。

じいちゃんは、死ぬ間際の一週間、伝えたいことを椎名君に伝えました。

言いたくないこと、今まで誰にもいえなかったことを伝えました。

そうしてでも、なにかを伝えたいと思ったことはありませんか？

永遠の七日間シリーズはここで終了ですが、けして終わったわけではありません。

いつも手に入らないものは永遠です。

唯一、人は永遠を手に入れることが出来ません。

ですが、おじいちゃんだけは・・・。

彼女との永遠を手に入れることが出来たのではないのでしょうか。

もちろん、気付いた方は・・・というか、読んだ方はお分かりでしょう。

おじいちゃんと彼女、と伏せている、二人の正体を。

しかし、わざと伏せました。

伏せた理由を合わせて、もう一度、読み返してください。

なにか、手に入れるものが見つかったら、私は幸せ者です。

では、またいつかどこかで。

10／10 .. 蝶々

あとがきの公園（後書き）

追記..

この作品は、2009年9月29日から10月10日まで他サイトにて執筆していた「七日間の花園」の続編です。

この作品もそのサイトにて執筆・公開していました。

移転にあたりこちらに引っ越した次第です。

上記の通り、完結です。

三部作、いかがでしたか？

なにか考えるものを手に入れていただけたら幸いです。

七日間のあとがきを君と

いかがでしたか。

といっても、ほぼ内容に変更はないんですが。

最後に番外編を・・・なんて思ってもいましたが、あえて書かずに締めさせていただきます。

じつは、他サイトでの公表順は、

- 1) 「図書館で逢いましょう」 「蝶々のつれづれポエム(当時は違うタイトルでした)」
- 2) 「七日間の楽園」
- 3) 「七日間の花園」
- 4) 「七日間の公園」
- 5) 「誓いのキス。」
- 6) 「STOP」
- 7) 「遠い日の歌」

でした。

ちなみに「魔女の魔法」「恋愛純度」は未公開のままこちらへ移し、「天然教師。」は完全な新作です。
未完のまま消えた作品もちらほら。

ただ、図書館の完結よりさきに七日間シリーズが完結したため、処

女作は七日間、と設定しています。

ポエムは完結することはないですし。

蝶々はこの作品をかなり愛しています。

ネットで初めて完結したからではなく、大好きだったんです。

ある種の実体験が含まれているからでしょうか。

この作品への入れ込みようはハンパじゃありません。

この作品は一旦完結しますが、終わることはありません。

風は、まだ止んでいません。

吹かすのは、この作品を読んだ誰かかもしれません。

この作品が誰かの心にピンで止められることを願って。

蝶々

2010／7／20

緊張と焦りと夏休みのさなかで

#引用・参考

「さとうきび畑」 寺島尚彦作詞作曲

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6188m/>

七日間の永遠を君と

2010年11月25日12時01分発行